

自分の体験を交えて書くことができる子

～第5学年国語「表やグラフを使って伝えよう」の実践から～

小千谷市立片貝小学校

教諭 佐藤 静子

I 授業改善の視点

資料の読み取りに関しては、社会の授業で多くのグラフ、写真、地図などを読み取る学習をしてきた。しかし国語では、資料に表れていることを読み取るだけでなく、資料を意見の根拠として引用したり、資料から分かることを文章に書いたりする力が必要になる。今年度の学習指導改善調査を分析してみると、本学級では、資料の読み取りが正しくできないことや、その読み取ったことをもとにして書かれた意見・理由を読み取ること、またその資料を参考にして自分の考えを書くことがよくできなかった。特に自分の体験を交えて考えの理由を述べることや、賛成案の問題点を述べることについて、得点が低かった。これは日頃、そのような学習をしてこなかったことに起因する。

教科書の「表やグラフを使って考えよう」の学習では、資料から事実を読み取ること、読み取ったことをもとに自分の考えを書くことをねらいとしている。本単元ではさらに、体験（見聞きしたことも含め）を交えて考えを書く力をつけることをねらって授業を構成したいと考えた。

II 実践の概要

1 単元名 「身近なことに結びつけて考えを書こう」

2 単元の指導目標

◎資料から読み取った事実を、自分の身近な事実と結びつけて文章に書くことができる。

3 単元で目指す子どもの姿

◎資料を読み取り、そこから考えたことを適切な文章にまとめることができる子ども

◎自分の考えを、自分の体験を交えて書くことができる子ども

4 目指す子どもの姿を具現化するための手立て

① 資料の読み取りとまとめ方について理解を深める工夫

同じ資料でも違う見方ができることや、「事実」「考え・思い」の書き方を理解させるために、モデルとなる文章を読み、資料のどの部分を引用してどのような考えを書いているか比較する活動を行う。

② 自分の体験を交えて書くための工夫

今回使用する資料を「小千谷市の人口」のグラフとし、身近なものにする。自分が実際に見たり聞いたりしていることと関連づけられるようにすることで、体験を交えた文章を書くことができるようにする。また、別の資料を元にして書いた書き方モデルを示す。

③ 体験を想起させる工夫

話し合いの視点を持たせるために、人口の減少がわかるような過去の写真を見せる。また、「～の人数」で考えるというキーワード（学校、きょうだい、家族、町内など）を示す。

5 単元の指導計画（全6時間）

次	時	学 習 活 動
1	1	・グラフや表を読み取る。
	2	・例文から「事実」と「自分の考え・思い」を読み取り、書き分け方を理解する。
	3	・身近な資料を読み取り、どのように考えるか話し合う。(完成型モデル文提示)
2	4	・グラフから自分が読み取ったことを書き出す。
	本時	・事実と結びつくことを身の回りから想起する。・自分の考えを簡単な文章に書く。
	5	・例文をもとに、自分の考えを300字程度の文章にまとめる。
3	6	・書いた文章を読み合い、評価する。身近なことに結びつけると、考えがまとめやすくなることに気付く。

6 指導の実際（4／6時間）

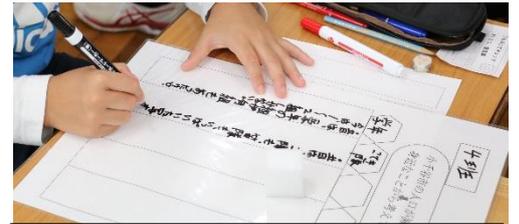
（1）体験を想起させる工夫

前時の学習で、食料自給率のグラフを見て考えを書く学習をした。その際に、資料を読み取ることはできても、そこから考えを書くことは難しいということが分かった。そこで、スーパーに売っている外国産のフルーツや野菜についてなど、身近なことに結びつけて書いた文章モデルを提示した。このことにより、身近なことに結びつけて考えると書きやすいということがわかった。

そこで本時では「小千谷市の人口」のグラフを提示した。小千谷市の人口が減っていることはすぐに読み取ったので、身近な事実としてどんなことがあるのか、さらに写真を資料として提示した。この写真をもとに、「～の人数」という視点を挙げて考えてみることにした。子ども、家族、町内、きょうだい、鼓笛などが出されたので、その視点にそって、身近な出来事を考えることにした。その際に思考ツールとして右のようなワークシートを使用してグループで考えを出し合った。



資料として提示した年代別の学級写真



視点から具体例を考えるワークシート

（2）自分の体験を交えて考えを書かせるための工夫

思考ツールに書いた内容を参考に、自分はどんな体験を交えて、どんな考えを書くのか、ワークシートに記入した。その際に、想起した体験は書けるが、自分の考えは書けない児童が何人もいた。そこで、体験と自分の考えをつなげて書いている児童のワークシートを紹介した。このことにより、何をどのように書けばいいのかがおおよそ分かり、自分の考えを書くことができた。

ワークシートに記入したことをもとに、300字程度の作文を書く場面では、書き出しは「小千谷市の人口は年々減ってきています。」に統一し、書き出しの抵抗をなくした。第2段落は、「身の回りを見てみると、」「わたしの家では」など、身近なこと（体験）を書くことを促した。また、前時に学習したモデル文を掲示し、何行くらいを体験、何行くらいを考え、というように、書く分量を目で見分けるように示した。

III 成果と課題

1 成果

表やグラフなどの資料を見て自分の考えを書くときには、身近なことを思い出し、それと結びつけて書けばよいことが、どの子にも分かった。また、モデル文を提示したり、友達が書いたものを聞いたりして、自分が書く文章をイメージすることができた。書き方の手順と、何をどのように書くかのモデルがあると、すべての子どもが自分の体験を交えて考えを書くことができることが分かった。

2 課題

今回は、小千谷市の人口減少について考えを書くという課題にしたが、児童にとっては、「考え」の内容がとらえにくかった。人口減少に対する対策を書くのか、感想を書くのか。また、相手意識もないので、誰に対し、何を述べるために書くのかという目的がなかった。「誰に」「何を」がはっきりすると、より自分の考えが書きやすいと感じた。

思考ツールは前もって指導者が準備したが、児童の思考の深まりや広がりやねらうためには、様々な思考ツールに使い慣れ、自分たちの考えに合わせて使えるようになるといいと感じた。

小千谷市の人口というわりと身近な問題を取り上げて、グラフの読み取りから考えを書くまでの学習を行ったが、他の表やグラフを見たときにも、今回のように自分の身近なことに結びつけて考えることができるのかどうか、疑問が残る。今後は、単元の学習に限らず、身近なことに結びつけて考え、思考を深めていけるような学習を研究していきたい。